

# 日本に所蔵される19世紀朝鮮全図に関する 書誌学的研究

—『大東輿地図』および関連地図を中心に—

楊 普 景\*・渋谷 鎮 明\*\*

- I. はじめに
- II. 『大東輿地図』および関連地図の概要
- III. 日本に所蔵される『大東輿地図』および  
関連地図
  - (1) 東京大学阿川文庫所蔵本
  - (2) 国立国会図書館所蔵本
  - (3) 東洋文庫所蔵本
  - (4) 天理大学附属天理図書館所蔵本
  - (5) 大阪府立図書館所蔵本
  - (6) 筑波大学図書館所蔵本
  - (7) 神戸市立博物館所蔵本
- IV. おわりに

## I. はじめに

本研究は、朝鮮時代後期に作成された朝鮮全図として、韓国において最も良く知られている『大東輿地図』と、同じ作者によって製作され、『大東輿地図』の基礎となった『青邱図』、『東輿図』等の、日本における所蔵の状況を明らかにするとともに、その書誌学的事項の一部について検討することを目的とする。

筆者らはこれまで『大東輿地図』について、渋谷は朝鮮時代の風水思想との関わりから、また楊は古地図・邑誌など当時の地誌資料に

関する研究の一環として研究を進めてきた。それらの研究を通じて、日本にかなりの数の『大東輿地図』およびそれと深く関連する地図が所蔵されていることが確認され、共同研究を行うこととなった。

次章で詳述するように、『大東輿地図』は、朝鮮時代(1392-1910)に作られた古地図としては最高傑作とされており、韓国古地図の代名詞といっても過言ではないであろう。その重要性は、日本の地図でいえば伊能図に対するような評価を受けているといえは理解しやすいかも知れない。そのため、韓国では、今日残存する『大東輿地図』は貴重書の扱いを受けており、場合によっては「宝物(国宝)」に指定されているものもある<sup>1)</sup>。

このような『大東輿地図』とその関連地図は、戦前期にさまざまな経緯で日本に持ち込まれ、各地の図書館や博物館などに所蔵されているとされる。しかし、それらがどこにどの程度所蔵され、どのような所蔵状態にあるのかについては、十分に把握されていない。またそれらがいかなる内容のものであるのかなどについても詳細には明らかになっておらず、その価値が十分に理解されていない状況にある。このような点に関する基礎的な作業は、今後の韓国における『大東輿地図』研究

キーワード：古地図，韓国，『大東輿地図』，金正浩，日本

や、韓国および東アジアの古地図研究に寄与するものであると考える。

なお、本論の内容は、1998年2月に日本の主要な図書館において行った7日間の共同調査と、その後2002年11月までの数次にわたる補足調査によるものである。

## Ⅱ.『大東輿地図』および関連地図の概要

日本においては『大東輿地図』についてあまり知られていないため、まずその概要について触れることとする。

『大東輿地図』は、1861年に金正浩（号：古山子）によって作成された、木版印刷による朝鮮全図である。縮尺はおよそ1：166,000で<sup>2)</sup>、当時としては大縮尺の地図であり、またきわめて詳細な全国地図であった。『大東輿地図』はその正確さによって韓国においてきわめて高い評価を受けている。なお、『大東輿地図』は1864年にも修正を加えて再版刊行され、さらにこれを編集・縮小したとされる『大東輿地全図』が刊行されている。

地図の形態はきわめて特殊で、韓国においては「分帖折畳式」と表現される。それは、朝鮮半島全土の地図を南北22層、東西19版に分割してあり、これを東西方向で切ること、東西方向に長い短冊状にし、さらにそれを屏風のように折り畳む形式になっているためである(図1、図2参照)。従って、地図自体は22帖に分かれているのが一般的な姿である。これらを全てつなぎ合わせると縦6.6m、横4.2m程度の巨大な朝鮮半島全図となる。なお、折り畳む際の東西の間隔は80里<sup>3)</sup>になっており、この縦120里×横80里を一マスとした大きなグリッドが作られているといっても良いだろう。そして木版の制作時にはこの二マス分が木版の一面に該当している。

朝鮮半島の最北部が描かれている第1層には、余白部分に制作の経緯などを記した「地図類説」、朝鮮八道<sup>4)</sup>の人口などの統計、地

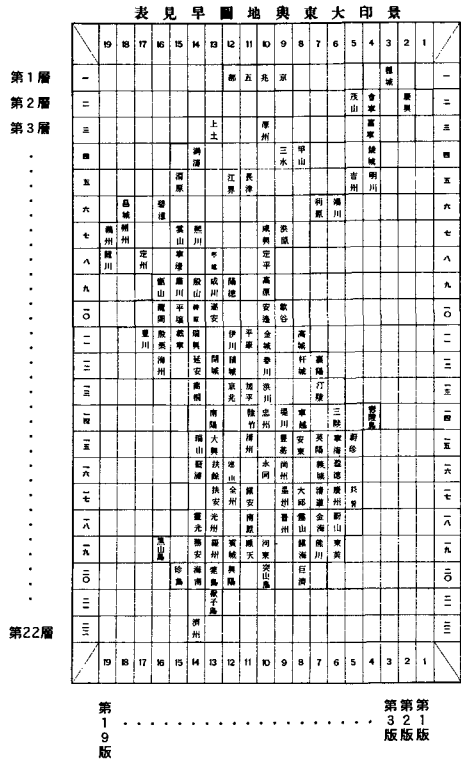


図1 『大東輿地図』の層と版  
(京城帝大版『大東輿地図』, 1936の索引図に筆者加筆)

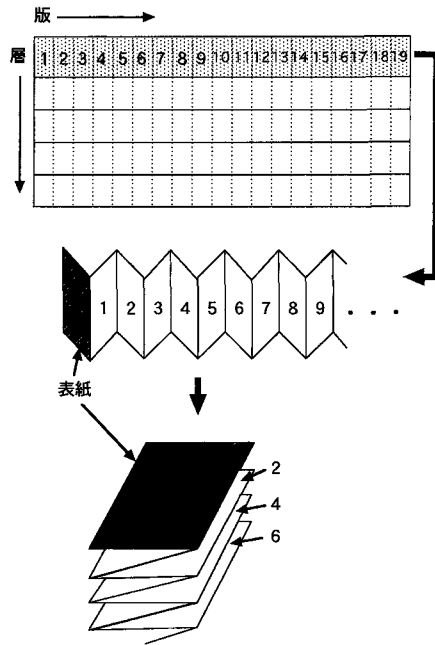


図2 『大東輿地図』の装丁方法

図中に用いられた「地図標（地図記号）」の一覧、当時の都である漢陽（ソウル）の地図が二種類描かれ、さらには地図制作に用いたグリッドである「方格表」が掲載されている。ここに記された10里四方の方眼は、『大東輿地図』作成の基礎になるものである。『大東輿地図』の第2層以降は全て朝鮮半島の地図であり、独特の表現で描かれている。そして層数が多いものほど南になり、第22層には最南端の済州島が描かれている。

地図中に記載された内容としては、当時の行政拠点であり官衙のあった都邑<sup>5)</sup>をはじめ、城郭<sup>6)</sup>、軍備のための鎮堡、駅、倉庫、牧所（牧場）、烽燧（のろし台）、陵寢（王陵）等のさまざまな施設の位置、10里ごとに目盛りの入った道路などが記され、自然環境として山と河川が詳細に記されている。また当時の行政区域の境界が詳細に記入されており、当時の行政区域を知るための重要な資料になっている。自然環境の描き方は独特で、図3に示すように山がひとつながりの線で描かれており、韓国においては「山岳投影法」と呼ばれている。この線はおおよそ「尾根線」を示しており、山と川のつながりがこの地図の骨格をなしている。

各事物の位置については、それまでに導入された方眼地図（経緯線表式の地図）の方法と、やはり地図の制作時期にはすでに把握さ

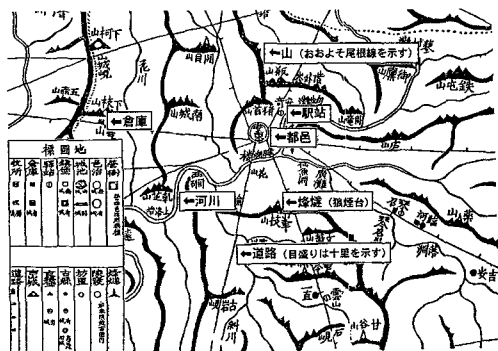


図3 『大東輿地図』の描写方法と地図記号  
（慶尚道安東付近、京城帝大版『大東輿地図』、1936に筆者加筆）

れていた各地の座標・極高（北極星の高さ）・距離を利用して正確な位置関係を把握し、それを地図上に記載したことで正確な地図が作成されたものと思われる。

またこの地図は木版印刷であったことから、古地図としては大量に作成されたものと思われ、日本も含めた各地に現存するものも相対的に多い。その携帯に便利な折り畳み式を採用していることから考えて、地図の普及・大衆化に寄与したものとも考えられる。

これまでの研究によると、作者である金正浩は、『大東輿地図』作成以前に、『青邱図』（1834年）を作成し、それと並行して『東輿図志』（1834年）を作成し、それと並行して『東輿図志』、『大東地志』などの地誌を作成し、そこで得られた地理的情報を地図に盛り込んでいったものと思われる（図4参照）<sup>7)</sup>。また『東輿図』は『大東輿地図』や『青邱図』とほぼ同一の手法で描かれた地図であり、金正浩が作成したものとされる。そのため本研究では『青邱図』、『東輿図』についても取り扱うこととした。

『青邱図』は、金正浩によって1834年に作成された筆写本で、金正浩が最初に作成した朝鮮全図とされ、『大東輿地図』の基礎となるものである。地図は「乾」「坤」二冊の冊子体から構成されており、木版本で折り畳み式の『大東輿地図』とはその形式が異なっている。内容についても山などの描写方法に相違があり、また『大東輿地図』よりも地名などの情報量が多い。

『東輿図』も筆写本であるが、22帖の構成は『大東輿地図』とほぼ同様である。『東輿図』は、現在のところ、1860年頃に金正浩が『大

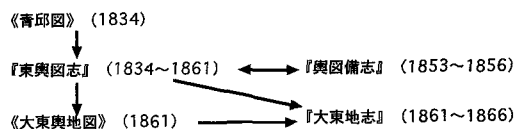


図4 金正浩作成の朝鮮全図と地誌の関係  
（楊普景、『古山子金正浩の地理志編纂とその意義』（韓文）、131頁を翻訳）

東輿地図』の底本としたとの説がある。ただし一部には『大東輿地図』制作以後に筆写したものとす説もあり、書誌学的な事項についてはまだ定かでない部分がある。

このように、『東輿図』の扱いについては不明な点があるものの、現在のところ金正浩は、『青邱図』→『東輿図』→『大東輿地図』の順序で朝鮮全図を作成したのではないかという説が一般的である。

『大東輿地図』の作者である金正浩の生涯については、まだ不明部分が多いが、彼の著した各種の地誌の記述などから、黄海道兎山で1804年に出生し、1866年以降に没したものと推定されている<sup>8)</sup>。

金正浩の身分は、比較的低いものであったとされ、朝鮮後期の著名な実学者である崔漢綺(1803-1875)や、兵曹判書などを歴任し、19世紀後半の朝鮮の代表的武官であった申櫓が後援者として助力を与えていたとされる。崔漢綺との交流は、たとえば金正浩の作成した『青邱図』の「図題」に崔漢綺の題文が記されていることから理解できる。

### Ⅲ. 日本に所蔵される『大東輿地図』および関連地図

本研究では、蔵書目録などをもとに、日本各地の主要な図書館・博物館にて所蔵確認を行うとともに、記載事項や地図の形式を、韓国に所蔵されている地図の内容との対比から検討し、作成年代、地図の種類などの書誌学的事項についても推定を行なった。

なお、本稿で取り扱う地図の範囲は、『大東輿地図』、そして前述のように『大東輿地図』と関係の深い『青邱図』、『東輿図』の表題がある地図を可能な限り全て調査することとした。但し、1936年に出版された京城帝国大学版複製本は、各地に多く所蔵され、その出典も明確であるため除外した<sup>9)</sup>。また調査途上において、『大東輿地図』と同様の形式を

持つことが確認され、『大東輿地図』作成に重要な影響をもたらしたと考えられる大阪市立図書館の『朝鮮図』については、例外的に取り扱うこととした。

『大東輿地図』と関連地図の所蔵については、表1のとおりである。全体として、予想以上に所蔵が多く、特に国会図書館と東洋文庫のように複数所蔵しているケースは、韓国においてもまれである。

このうち、『大東輿地図』と題されるものは国会図書館と東洋文庫、天理大学図書館にあわせて7部所蔵されている。なお、天理大所蔵のものは調査時に特別本のため閲覧ができず、本稿では取り扱わなかった。関連する地図については、前述の『青邱図』、『東輿図』などの所蔵も確認された。

以下に地図ごとの詳細な情報と、制作時期などの書誌事項について述べる。

#### (1) 東京大学阿川文庫所蔵本

##### 1-1. 大東輿地全図

19世紀後半に制作されたものと推定される『大東輿地全図』と同一の地図であり、『大東輿地図』を縮小編集し、朝鮮半島全体を一枚の地図にしたものである(図5参照)。なお、これが『大東輿地図』と同じく金正浩の作であるかどうかについては議論があり、まだ確認されていない。跋文に大池周八十里とあり、海を表示する文様部分に薄い空色の着色がなされている。また、裏面に『八道総図』が貼付され、一冊に装丁されている。

#### (2) 国立国会図書館所蔵本

##### 2-1. 大東輿地図

1861年作成の『大東輿地図』(木版本)の彩色筆写本であり、筆写の時期は1869年頃と推定される。

これは地図中に示された邑の地名から推定される。地図中に京畿道の豊徳が表示してあるが、豊徳は1866年に邑として復設<sup>10)</sup>され

表1 日本に所蔵される『大東輿地図』と関連地図

| 所蔵場所                 | 地図の表題<br>(図書番号)                   | 冊帖数        | 制作時期<br>(一部推定) | 特 徴                                                      |
|----------------------|-----------------------------------|------------|----------------|----------------------------------------------------------|
| 1. 東京大学図書館<br>(阿川文庫) | 1-1. 大東輿地全図<br>(A00-5777)         | 1 枚        | 19 c 末         | 『大東輿地全図』と『八道総図』を一帖に装丁。                                   |
| 2. 国立国会図書館           | 2-1. 大東輿地図<br>(848-167)           | 22帖        | 1861年前後        | 1861年初刊本の写本。彩色筆写本。<br>面、書院を追加して記入。                       |
|                      | 2-2. 東輿図<br>(217-37)              | 22帖        | 1861年          | 『大東輿地図』初刊本。木版本。表題と内容が異なる。                                |
|                      | 2-3. 大東輿地図<br>(292. 1038-Ki-229d) | 22帖        | 1861年          | 初刊本。木版本を彩色。陸軍文庫「兵図」を移管したもの。5 cmメッ<br>シュの記入あり。面名を追加記入。    |
| 3. 東洋文庫              | 3-1. 大東輿地図<br>(VII-2-159)         | 22帖        | 1864年          | 再刊本。木版本。21層と22層を20層につなげて添付。                              |
|                      | 3-2. 大東輿地図<br>(VII-2-245)         | 22帖        | 19 c 末         | 筆写本。前間恭作氏所蔵本を移管したもの。表紙裏面に地図分作凡例<br>表示。                   |
|                      | 3-3. 東輿図<br>(VII-2-192)           | 2 冊        | 19 c 中葉        | 表題とは異なり『青邱図』の形式に類似。経緯線表目録、八道分俵、<br>諸標総目、州縣総図目録と、各道の地図あり。 |
|                      | 3-4. 大東輿地図<br>(VII-2-158)         | 22帖        | 1861年          | 初刊本。木版本を彩色。初刊修正本。                                        |
| 4. 天理大学付属<br>天理図書館   | 4-1. 東輿図<br>(292. 1-タ23)          | 2 冊        | 19 c 末         |                                                          |
|                      | 4-2. 青邱全図<br>(292. 1-タ61)         | 2 冊        | 19 c 中葉以後      | 図書館で準特別本に指定。金正浩『青邱図』を筆写したものと推定。                          |
|                      | 4-3. 青邱図<br>(292. 1-タ189)         | 3 冊        | 19 c 中葉        | 図書館で準特別本に指定。「今西春秋図書」の印あり。                                |
| 5. 大阪府立図書館<br>中之島分館  | 5-1. 青邱図<br>(韓5-110)              | 2 冊        |                | 彩色筆写本。                                                   |
|                      | 5-2. 朝鮮図<br>(韓14-7)               | 26帖        | 19 c 前半        | 彩色筆写本。内容的には『青邱図』と同一。                                     |
| 6. 筑波大学図書館           | 6-1. 東輿図                          | 17帖        | 1795～1800年     | 彩色筆写本。                                                   |
| 7. 神戸市立博物館           | 7-1. 大東輿地図                        | 1 帖<br>14図 |                | 表題とは異なり、『大東輿地図』とは全く別の朝鮮道別地図本                             |
|                      | 7-2. 大東輿図                         | 22帖        | 1861年          | 『大東輿地図』初刊本。表紙に「井上宣之文庫」とある。                               |

## 大東輿地全圖

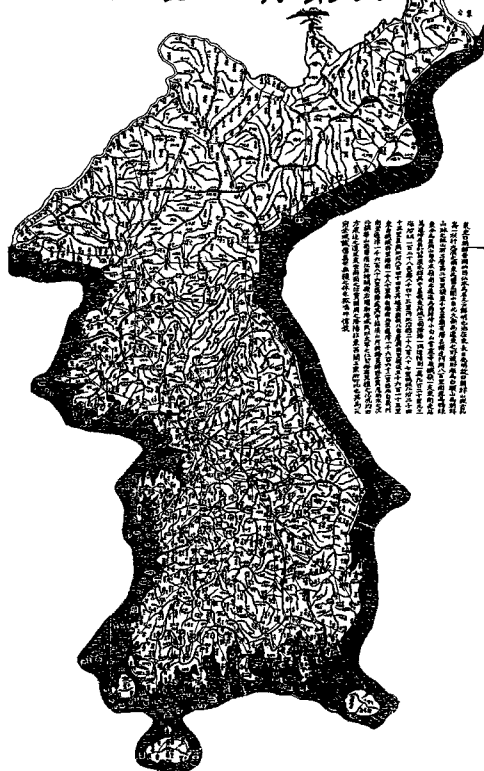


図5 『大東輿地全圖』(韓国・中央地図社複製版)

たため、それ以後の模写本であると推測される。さらに第3層の表示「厚州」の下に「今改為二邑厚昌慈城」との記入があるが、これは1869年に厚州郡と茂昌郡が合併し、新たに「厚昌郡」が設けられたことが示されたものである。この点からは1869年以後に記されたものであることが推測される。

第1層第3版「方格表」右側上段に「古山子金伯温」と記録されている。郡縣の境界を表すために紫色、褐色、水色、コバルトグリーン色の四色を交互に用いて着色している。また「昭和15年購入」との記録がある。

第1層第7版「地図標」には本来『大東輿地全圖』にはない書院と面<sup>11)</sup>の記号を追加しており、「▲書院」、「ㄆ面」と表示し、「ㄆ」の上に赤色の点をうってある。本来『大東輿地全圖』にはあるはずの、道路上の10里ごとの

表示がされていない。

### 2-2. 大東輿地図

金正浩作1861年の初刊本(木版本)である。「地図類説」が地図標の後にある。また印刷状態はきわめて良好である。

河川に薄青色、郡縣名の背景に黄色、烽燧・王陵・城郭・営衛(役所)の輪郭線に赤色、駅・牧場・邑治に黄色の彩色がなされている。

### 2-3. 東輿図

表題は『東輿図』とあるが、金正浩作『大東輿地全圖』の1861年初刊本である。木版本に彩色・書き込みがなされている。表題に「大東輿地全圖」とあり、表紙に「陸軍文庫 第1130番 二」「兵図 222番 二号 二二冊」とあり、陸軍文庫より移管されたものと思われる。

この地図でもっとも目を惹くものは、地図全体に5×5cmのグリッドが描かれている点である。まず、咸鏡道羅暖から南北方向に赤色の線が色鉛筆で描いてあり、これを基準としてメッシュが記入されている。

また本来はない面名が追加されているが、追加時に上記2-1の『大東輿地全圖』と同じ方式で表示してある。第八層には面名、山名、峠、烽燧、浦口の名前などが追加されている。また全般に書き込みにより修正を加えられた部分が多く、特に西海岸の平安道龍川、鉄山付近、黄海道信川、載寧、文化、鳳山、瑞興、兎山一帯に特に多い。その他、八道の境界は太い朱線で明確に区分され、面名が大部分の地域に追記してある。

### (3) 東洋文庫所蔵本

#### 3-1. 大東輿地図

金正浩作の木版本に彩色が加えられたものである。初版後の修正部分が確認され(図6)、1864年の再刊本であることが理解される。また第1層にあるべき「地図類説」が抜けている。表紙に「當寧元年甲子」<sup>12)</sup>とある。

第20層右側に、本来第22層にある濟州島部

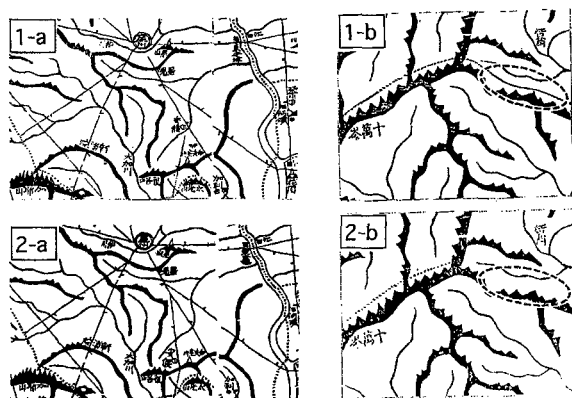


図6 『大東輿地図』再刊本の修正部分

1-a, 2-a: 第17帖慶尚道星州安偃駅の位置と道路が変更されている。  
1-b, 2-b: 第4帖咸鏡道長津と十萬岑付近の境界線(点線)が無くなっている。

1: 『大東輿地図』初刊本(1861年), 2: 『大東輿地図』再刊本(1864年)

分を貼付し、第21層に該当する楸子島の部分は第20層の莞島、海南の下段に貼付し、全体を20帖として作成している。邑集落を赤色、鎮堡の輪郭線を褐色、山城、鎮、烽燧に赤褐色、海を薄い空色に彩色してある。平安道身弥島内の西部に「牧」を追加してある。保存状態が悪く、虫食いが多い。

### 3-2. 大東輿地図

『大東輿地図』の筆写本で、形態は実物と同様の折り畳み式である。18枚の正方形の紙に分けて筆写し、一旦貼り合わせたものと思われる。表紙には「前間氏所蔵」との添紙があり、韓国併合などに深くかかわった前間恭作<sup>13)</sup>の所蔵であったことが理解される。

地図は合わせて21の部分に分割され、各々に独特の名称を付してある(図7参照)。まず東西方向に天、地、玄、黄、宇、宙、洪、荒、日に分割し、その上で天、地および宙、洪については乾、坤の各々二つの部分に、玄については元、亨、利、貞の四つに分けてある。さらに黄、宇、荒については上、中、下の三つの部分に分割してある。日は分割されていない。この各々が本来の『大東輿地図』のように折り畳まれている(図2参照)。これは地図に表示された朝鮮半島の陸地部分の形

|   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| 天 |   | 坤 | 乾 |   |
| 地 |   | 坤 | 乾 |   |
| 玄 | 貞 | 利 | 亨 | 元 |
| 黄 | 下 | 中 | 上 |   |
| 宇 | 下 | 中 | 上 |   |
| 宙 |   | 坤 | 乾 |   |
| 洪 |   | 坤 | 乾 |   |
| 荒 | 下 | 中 | 上 |   |
| 日 |   | ○ |   |   |

図7 東洋文庫所蔵『大東輿地図』(表1中3-2, 筆写本)の構成

(構成のみを示し、各々の部分の大きさ・比率については示していない。○印は名称が付されていない部分を示す。)

状に合わせたためであり、各部分の大きさは各々異なっている。

また昭和17年6月25日に東洋文庫が入手したとの記載がある。この年は本来の所蔵者である前間恭作が死亡した年である。図中には彩色がなされ、郡縣境界を黄色、道路を赤色、山地を褐色の線でそれぞれ彩色してある。

### 3-3. 東輿図

『東輿図』との題名が記されているが、二冊(乾・坤)本で構成され、『青邱図』の形式と類似している。表紙には「幣原図書」の印が押されている。版心には、『東輿図』線表とある。

内容は、経緯線表目録、八道分俵、州縣総図目録、諸標目録に続き、京畿忠清全図、慶尚全図、全羅全図、黄海全図、江原全図、咸鏡全図、平安全図の、道ごとの地図がある。したがって『大東輿地図』形式の地図ではない。

製作時期は、1856年に交河から他に移転した純祖の墓地である仁陵が交河に描かれ、1846年に楊州龍馬峰に移葬された翼宗の墓地の綏陵が天馬峰(龍馬峰)の下に描かれている点から、1846年以後、1856年以前と推定さ

れる。

#### 3-4. 大東輿地図

金正浩作の1861年初刊本（木版本）に彩色を加えたもので、22帖よりなる。3-1のものとは異なり、「地図類説」が付属している。聞慶聊城駅左側道路がつながれておらず、初刊の修正本と思われる。各帖の表紙に、「大東輿地図第一幅」などの様式で木版印刷した題目を新たに貼付してある。また表紙の右側上段に郡縣名が記入されている。その他、江原道蔚珍付近に「越松」の字が新しく記入されている。

#### (4) 天理大学附属天理図書館所蔵本

##### 4-1. 東輿図

表題とは異なり2冊に分かれた『青邱図』の形式で、上記の東洋文庫所蔵の3-3『東輿図』と同一のものである。序文には1893年とあり、この当時に作成されたと思われる。

##### 4-2. 青邱全図（準特別本）

乾坤2冊で構成される『青邱図』方式の地図である。表題に「青邱全図 乾坤」とある。巻頭に多数の地図があり、この点が『青邱図』とは異なっている。「乾」巻には、青邱図題（崔漢綺による）、青邱図凡例、地図式、本国遼瀋合図、新羅九州郡縣総図、高麗五道兩界州縣総図、本朝八道州縣総目、都城全図があり、「坤」巻には、東方諸国図、新羅九州郡縣総図（下）、高麗五道兩界州縣総図（下）、本朝八道州縣総図（下）、都城全図（下）がある。また地図中に、本来『青邱図』にあるはずの道路が描かれていない。

##### 4-3. 青邱図（準特別本）

3冊で構成されている。今西文庫に昭和35年3月21日受入との記録がある。表紙に表題はなく、「今西春秋図書」印のみがある。表紙裏面には昭和42年9月25日の天理図書館印がある。

序文に多くの図があり、第1冊序文は冒頭に「甲午年後……」とある。その後に青邱図

題（崔漢綺）、東方諸国図、四郡三韓図、三国前図、新羅九州郡縣総図、高麗五道兩界州縣総図、本朝八道州縣総図が添付されている。第2冊序文には朝鮮盛京合図、新羅九州郡縣総図（下）、高麗五道兩界州縣総図（下）、本朝八道州縣総図（下）が添付されている。

第1、2冊が、通常の『青邱図』の乾坤二巻であり、第3冊は「八道沿革事実」、「道里考」（18枚）、「経緯表」（60枚）から構成されている。1895年以後に筆写されたものと思われる。本来『青邱図』にある「都城全図」が添付されていない。

#### (5) 大阪府立図書館所蔵本

##### 5-1. 青邱図

2冊で構成された彩色筆写本である。表紙は暗緑色の布で装幀されている。表紙に大正4年4月19日付の図書館印がある。表題は「青邱図 奇偶」とあり、「奇」「偶」の二巻となっている。「奇」巻には序文として青邱図題（崔漢綺）があり、続いて東方諸国図、四郡三韓図、三国前図、新羅九州郡縣総図、高麗五道兩界州縣総図、本朝八道州縣総図がある。「偶」巻には朝鮮盛京合図、新羅九州郡縣総図（下）、高麗五道兩界州縣総図（下）、本朝八道州縣総図（下）がある。通常あるはずの「都城全図」が無い。

##### 5-2. 朝鮮図

26枚組の彩色筆写本で、冊子形態に装幀されている。筑波大学図書館所蔵の『東輿図』と輪郭、形態が同一である。この地図は1800年に改称された利原と魯城が表記され、1822年に新設された厚州がない。また1823年になくなった豊徳が描かれているため、1800～1822年に製作された地図であるとされている。

道路が赤色の曲線で記されており、十里ごとに黒色の小円が記されている。地域を、「箕一」～「箕六」などのように漢字と漢数字の組み合わせで表記してある。また東西の版を子丑寅卯…のように、十二支で区分してあ

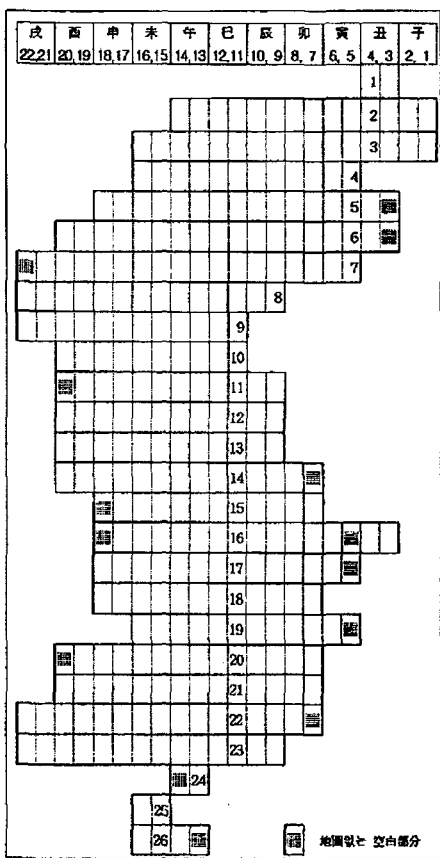


図8 大阪府立図書館所蔵『朝鮮図』(表1中5-2)の構成

(楊普景「日本大阪府立博物館所蔵『朝鮮図』の考察」(韓文), 書誌学研究17, 1999, p428)

る(図8)。図中の地名など、字は小さな縦長の長方形で囲まれて記されている。また面名が記録されている。郡縣境界は点線で示され、黄色で加彩されている。道の境界は黄色の上に薄い青色を加彩してある。

半島北部に位置する穩城付近の豆満江の流路が『青邱図』、『大東輿地図』と相違しており、東北側が突出している。山地は薄い緑色、河川は薄い青色に彩色されている。長白山など、山地部分が強調され、薄い緑色で描かれた山々の上に黒い模様が描かれている。

#### (6) 筑波大学図書館所蔵本

##### 6-1. 東輿図

22枚組の彩色筆写本で、全国各郡縣の境界を点線で表示した上で彩色を施し、全国地図であるにも関わらず、面名と越境地<sup>14)</sup>を記録した、内容の豊富な地図である。また山川、烽燧、倉庫、驛院、道路、古蹟、寺刹等を詳細に表示し、各地域を把握するのに基本的な内容を全て備えている。

面名、古蹟など、地図の中に収録された内容は『青邱図』よりは少ないが、『大東輿地図』と比較すれば非常に豊富である。また山を絵のように描いて山地を表す点、道路を赤色の曲線で表現した点は『青邱図』と同じ方式であり、朝鮮後期の一般的な地図表現である。また道路上の10里ごとの点は記されておらず、小円を描いて表示するという相違がある。

なおこの地図は地名などから1795~1800年に制作されたものと推定される<sup>15)</sup>。

#### (7) 神戸市立博物館所蔵本

##### 7-1. 大東輿地図

1帖14図の手書手彩本で、地図の名称は『大東輿地図』と表示されているが、内容は全く異なる道別地図本である。構成は「天下図」「中国図」「日本国図」「八道総図」「京畿道」「全羅道」「慶尚道」「忠清道」「江原道」「黄海道」「咸鏡道」「平安道」「箕城図」(平壤地図)となっている。世界地図と中国・琉球・日本など外国地図に続き、朝鮮八道の道別地図で構成され、最後に平壤の地図である「箕城図」が含まれており、興味深い。平壤に居住したか、官員として赴任するなど平壤に関係ある者が作成した地図と推測される。

##### 7-2. 大東輿図

22帖で構成された木版本の『大東輿地図』である。表紙に「井上宜之文庫」印がある。表紙だけではなく、各帖の表紙と地図の右側か左側余白にも同一の印が押されている。表題は「大東輿図」となっているが、内題は「大東輿地図」とされている。内題右側上段に「當

宇十二年辛酉」<sup>16)</sup>、左側下段に「古山子校刊」と記され、1861年に刊行された初版本の『大東輿地図』であることが理解される。

#### IV. おわりに

本稿では日本各地の主要な図書館・博物館に所蔵される『大東輿地図』と、関連地図である『青邱図』、『東輿図』を中心に、その所蔵状況と地図ごとの内容について検討してきた。その結果、現在のところ『大東輿地図』の初刊本が4点、再刊本が1点、その筆写本が2点確認された。さらにその編集図である『大東輿地全図』も1点確認され、関連地図である『青邱図』は3点確認された。また『東輿図』を表題とする地図が3点あったが、これは韓国で認識されている形式とは異なるものであった。

このように、表題は同一でもこれまで韓国の古地図研究において認識されていた形式と異なったり、後の筆写本であるなどの例が見受けられ、表題だけではその内容は判断できない。本稿のような詳細な調査の意義が確認されると共に、筆写本についてはかなりのバラエティがあることが理解されよう。

次に、ここまでに検討した『大東輿地図』、そして関連古地図の内容について、確認された点としては、上記の表題の問題とも関連するが、地図ごとにさまざまな種類が見られたことがあげられる。

具体的な例をあげると、『大東輿地図』と題されるものの中でも、さまざまな種類があった。たとえば3-1は、1864年の再刊であることが修正部分から確認され、2-1、3-2番のものは本来木版刷りの『大東輿地図』を筆写したものであった。また、4-1のように、明らかに『青邱図』の形式であるが、『東輿図』と題されているものもあった。さらには、題名と内容がほぼ一致していても、その内容にも、本来あるべき記載が無いなどの異

同が見られる。たとえば『大東輿地図』の内容として必ずあるものと考えられている「地図類説」が無いもの(表1中3-1)が認められた。

次に、本来の地図に後から書き込み、彩色を加えたものが多く見られたことである。とりわけ面名を中心とした地名の追加、道路・道郡縣の境界、海や河川への彩色が多く見られた。

第三に、韓国で知られている金正浩作成の地図とは異なった種類の地図が確認されたことである。とくに筑波大学図書館所蔵の『東輿図』(6-1)はこれまで知られていた『東輿図』とは異なっており、年代についても、記載されている地名などから『青邱図』より古いものである可能性がある。そうだとするとこれまで考えられてきた作成過程、すなわち『青邱図』→『東輿図』→『大東輿地図』という順序に再考を迫るものである。ただし、『東輿図』という名称は、朝鮮半島の地図(中国からみて東方の土地)という包括的な意味を持つため、固有の地図の名称ではないと考えるべきであるかもしれない。

第四に、『大東輿地図』が、日本において資料などとして用いられた可能性についてである。今後、地図そのものや背景についてより詳細な検討が必要ではあるが、上記2-2『大東輿地図』の1861年の初刊本には「陸軍文庫兵図」の印があり、また後から5cmメッシュが記入されているため、何らかの形で利用された可能性が考えられる。また3-2は、『大東輿地図』を筆写したものであり、また韓国併合に深く関わった前間恭作氏所蔵のものであるため、やはり『大東輿地図』が資料として活用されていた可能性が考えられる。

日本に所蔵される『大東輿地図』、そして『青邱図』、『東輿図』は、日本の伊能図にあたるような、それ自体貴重なものであるとともに、これを検討することによって朝鮮時代末期の古地図研究に寄与するところが多いと考

えられる。

今回調査を行った『大東輿地図』などの地図は、これ以外にもまだ日本各地に所蔵されている可能性があり、より詳細な所蔵調査が必要である。

なお、『大東輿地図』以外にも日本にはさまざまな朝鮮時代の古地図が所蔵されており、今後、『大東輿地図』のみならず、他の資料についても調査の機会を持ちたい。

(\*韓国・誠信女子大学校, \*\*中部大学)

#### 〔付記〕

本稿は平成12年度歴史地理学会大会にて発表した内容に、補足調査を加え、加筆・修正したものである。また本研究には、平成14年度中部大学特別研究費の一部を使用した。

なお、資料の閲覧・収集においては、各図書館・博物館の担当者の方々に協力を頂きました。特に神戸市立博物館所蔵資料については、博物館の担当者の三好唯義・圃木田明子氏をはじめ、神戸大学文学部の長谷川孝治先生にも多くのご協力を頂きました。ここに記して感謝いたします。

#### 〔注〕

- 1) 誠信女子大学校博物館に保存される『大東輿地図』は、韓国の宝物第850号に指定されている。さらに2002年にソウル歴史博物館所蔵の『大東輿地図』が宝物第850-1号に、『東輿図』が宝物850-2号に指定された。
- 2) 『大東輿地図』は10里ごとのグリッドを基本として作成されており、朝鮮時代の「里」がどのくらいの距離を示すのかについて諸説あり、そのため『大東輿地図』の縮尺にも諸説が存在する。しかし、これまでの研究をみるとおおよそこの程度の縮尺であると考えられている。筆者の一人である楊は以下の論文において『大東輿地図』の縮尺について検討を行っている。  
楊普景「日本大阪府立博物館所蔵『朝鮮図』の考察」(韓文), 書誌学研究17, 1999, pp.421-436.

- 3) 朝鮮時代には度量衡の一つとして距離を表す「里」が用いられたが、その長さについては、「周尺」の長さが基本であり、1里が360歩、1歩が周尺6尺であった。『大東輿地図』が作成された朝鮮後期には周尺1尺が19.3~19.8尺であり、1里は2,160尺であるため(6尺×360歩)およそ416.88~427.68mとされる。
- 4) 朝鮮時代には行政単位として、平安道、咸鏡道、黄海道、江原道、京畿道、忠清道、慶尚道、全羅道の八つの「道」が設定され、これを「八道」と総称する。
- 5) 朝鮮時代には、八つの道の下に合わせて330程度の府、都護府、牧、郡、縣などの行政単位が置かれ、「郡縣」と総称されることが多い。各郡縣には中央の役人である守令が派遣される中心集落があり、「邑」,「邑治」などと呼ばれている。この邑と国都である漢陽をあわせて都邑と呼ぶ。
- 6) 朝鮮時代には、軍事的拠点として各地に山城や海岸沿いの城郭が築かれた。また上記の都邑にも城壁を持つものが多かった。『大東輿地図』にはこのうち主として山城が「城郭」として記載された。
- 7) 具体的には金正浩は、『青邱図』(1834年)を製作した後、『東輿図志』を修正補完し、これをもとに『大東輿地図』を版刻した。その後、『東輿図志』を基礎に『大東地志』を作成したと考えられる。  
楊普景「古山子金正浩の地理志編纂とその意義」(韓文), (『古山子金正浩記念事業研究報告書』(韓文), 国立地理院, 2001), pp.103-141.
- 8) 金正浩が1866年以降に没したとの説の根拠は、彼の著した『大東地志』に、1866年に高宗王妃となった閔妃について記されていることである。このことから、金正浩が1866年以降まで生存していたと推定されている。  
李相泰「古山子金正浩の生涯と思想」(韓文), 地理学26-1, 1991, pp.139-144.
- 9) 京城帝大版『大東輿地図』の「凡例」によると、当時の朝鮮総督府朝鮮史編修会所蔵の辛酉刊本(1861年初刊本)を用いたとある。
- 10) 朝鮮時代の行政拠点であった「邑」が一旦廃

- 止された後に再び邑に昇格することを指す。
- 11) 面は朝鮮時代の行政単位で、官衙（役所）がおかれる郡縣の下の単位であり、書院は当時の私的な儒学教育施設である。これらは本来『大東輿地図』には記載されない。
  - 12) 当時の国王であった高宗の即位元年を指す。高宗は1863年に即位したため、「元年甲子」は1864年となる。
  - 13) 前間恭作は対馬の出身で、1891年に留学生として朝鮮に渡り、朝鮮日本領事館書記生、韓国統監府・朝鮮総督府の通訳官となった。朝鮮語学者としても知られており、東洋文庫に彼の朝鮮関係の資料が多数寄贈されている。
  - 14) 朝鮮時代の郡縣の飛び地を指す。
  - 15) 詳細な検討は以下の論文において、楊がすで行なっている。  
楊普景「日本大阪府立博物館所蔵『朝鮮図』の考察」（韓文），書誌学研究17，1999，pp.421-436.
  - 16) 当時の国王であった哲宗の十二年を指す。哲宗は1849年に即位したため，元年は1850年，「十二年辛酉」は1961年となる。

## A Bibliographical Study on Korean Old Maps of Nineteenth Century kept in Japan —Focusing on “Dae-dong-Yo-ji-do” and Related Maps—

YANG Bo-Kyung and SHIBUYA Shizuaki

“Dae-dong-Yo-ji-do” is an old woodblock printed map, which is the most well-known in Korea. Some libraries and museums in Japan own Korean old maps, including “Dae-dong-Yo-ji-do”. However little attention has been paid to them. The purposes of this paper are to introduce them and to examine their bibliographical subjects such as whereabouts and preserving condition.

“Dae-dong-Yo-ji-do” is a large-scale map of the Korean Peninsula (1:166,000). It was drawn by Kim Jung-ho and printed in 1861. The accuracy of this map is highly evaluated as a map in Chosun era, because there was no modern mapping techniques at that time. Furthermore the map has some unique characters: its representation of mountains and rivers, and its form divided into 22 long pieces. Before “Dae-dong-Yo-ji-do,” “Chong-gu-do” and “Dong-yo-do” are drawn by Kim Jun-ho. These two maps are also regarded important in Korea.

The results of our examination are as follows:

1. In some libraries and museums in Japan there are 4 first prints, 1 reprint, and 2 copies of “Dae-dong-Yo-ji-do”; 1 “Dae-dong-Yo-ji-jun-do,” which is a compilation map of “Dae-dong-Yo-ji-do”; 3 “Chong-gu-do”; 3 “Dong-yo-do”, which have different style and contents from “Dong-yo-do” in Korea.
2. Thorough our bibliographical examination these old maps kept in Japan turned out to have variety unexpectedly. For example, many maps are colored or added notes or the name of places. There is possibility that some Japanese copied or used these maps later.

**Key words:** old map, Korea, “Dae-dong-Yo-ji-do”, Kim Jung-ho, Japan